

資料室だより 96

めずらしい楽譜を購入しましたのでご紹介します。

ビーバーBiber, Heinrich Ignaz Franz(1644-1704)のソロ・モテット *O dulcis Jesu* です。ソプラノ独唱とヴァイオリン、通奏低音の編成です。ビーバーといえばヴァイオリンのための「ロザリオのソナタ」が有名です。当資料室もデンクメラーの中に所収されたロザリオ・ソナタを持っています。彼はヴァイオリニストでもあり、ヴァイオリンの作品にすぐれた力を発揮しますので、このような声楽曲にも独立したヴァイオリンのパートがあり、すでに資料室にある独唱曲 *Nisi Dominus aedificaverit domun* においてもヴァイオリンのオブリガート声部が、歌と対等に動きます。

この *O dulcis Jesu* はビーバーの作品表には載っておらず、この作品もビーバーのものかどうか真偽は明らかにはなっていません。ですからこの楽譜が初版ということです。カトリックの信仰の強い南ドイツのある地域で、無名の誰かによって筆写されています。楽譜の校訂者は、テキストにおけるキリスト教神秘主義について触れ、タイトル・ページの次にベルニーニによる「脱魂する聖テレサ」の絵を掲げています。序文にはめずらしく、テキストと音楽との内的関係が霊性史のコンテクストのなかで述べられていますので演奏なさる方はお読みください。聖テレサの思想や書き物を知らない方で調べたいという方は、資料室にあります「神秘主義事典」(ディンツェルバッハー)で“テレサ・デ・アビラ”の項をひかえるとよいと思います。テレサは改革カルメル会の中心人物ですから、カルメル会の霊性を調べるには同じく資料室にある「修道院文化史事典」の“カルメル会 “のところをごらんになるとよいと思います。このようにしてひとつの楽曲から出発して、その文化を支える様々な事象について調べ、その時代の関連書籍を読んでいくということが音楽の勉強には必須なのではないでしょうか？

もう一冊。Die Besondere Gattung(特別なテーマで集められた)というオルガン曲集のシリーズで、“Carillons in der Orgelmusik” というもの。様々な作曲家の鐘をモチーフにした曲が集まっています。Les cloches, Carillon, L'Angelus, Vesper Bells, Entrée-Carillon などなど。このシリーズは他には、パストラレー集、トッカータ集、アヴェ・マリア集、などがあり、追々に買い集めていきたいと思います。

(杉本ゆり記)